
月 刊

MéLange

Vol. 100



2015.03.29

詩と評論

月刊「MéLange」 Vol.100 2015.03.29

「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」百号発行記念企画：03

★百号百字文

- 上野 都
- 得平秀昌
- 大西隆志
- 月村香
- 高木富子
- 中嶋康雄
- 中堂けいこ
- 大橋愛由等
- 富 哲世
- 御着かおり
- 三谷白水
- 高橋雅城
- 寺岡良信
- 原田哲郎
- 黒田ナオ
- 岩脇リーベル豊美
- 有時秀記
- 福田知子
- 今野和代
- 高谷和幸
- 北村虻曳
- 安西佐有理
- 木澤 豊

詩 & 俳句ほか

- 朝のミミズの廃線電車……………中嶋康雄 11
- 忌日十句 演歌！五首 狂歌！五首……………高橋雅城 12
- 宝石……………月村 香 13
- 聴許……………御着かおり 14
- 昼月……………上野 都 15
- 母……………福田 知子 18
- 太る……………黒田ナオ 19
- 十字架と車椅子……………有時秀記 20
- 春分……………岩脇リーベル豊美 22
- 命題～さわぎくる光もあれかし蟹の海……………大西久代 23
- 痕跡……………大橋愛由等 24
- 春白縷述……………中堂けいこ 25
- 四月……………寺岡良信 26
- ねの位相……………高谷和幸 27
- 雑草考……………大西隆志 28
- 過ち……………富 哲世 29

追悼・和田悟朗

- 和田悟朗句回想……………野口 裕 08
- 死は来る／和田悟朗との一期一会の句会……………堀本 吟 10

連載エッセイ & 詩評

- 〈詩人通りより〉19「翻訳について思うこと」……………岩脇リーベル豊美 16
- ひと言詩評〈3〉……………富 哲世 21
- 夜の調べに寄せて(桂米朝—思い出のままに／朝桜米朝はんが逝かはって)……………寺岡良信 30
- 神戸詞あしび 89「三月の雲たちはうろたえていた」……………大橋愛由等 32

編集部だより★21/100回目となる「Mélange」月例会のうち読書会は、有時秀記さんの発表です。内容は、「《デリダ『声と現象』について》、及び《デリダによるツェラン》—世界は消え失せている、私はおまえを担わなければならない。『声と現象』は難解なので、出席者と共に理解を深められれば幸いです。」とのメッセージをいただいております。〈大橋記〉

百号百字文

「月刊めらんじゅ」100号発行特別企画

▼上野 都

百の船が、百の海に出た、一つの港から。その名はコウベ。積み残した荷もあるし、積みなかつたものもある。ただ、コトバで船が傾いたとはまだ聞かぬ。いまだ船は航海中。無寄港銀河一周。毎月、板を継いだ甲板の修理に忙しい、と。

▼得平秀昌

「思えば遠くへ来たものだ」中世の二倍の時間を生きてはみたが、はてさて焚き火をするほどのこと。気が付くと目の前にラッパ水仙8輪。みんな背を向け。名に負はばちよいとラッパを吹き鳴らせ。ワタシノ妙ナル音ハアナタノ耳ニハ聴コエナイ。

▼大西隆志

百字片
漕ぐことが大事だった。手にしている文字が川面に小さな渦を描く。通り過ぎる雨雲に眺められながら狂騒の命令書を破っていた。音に抱えられた象形のコンプラスに詰められる世界の道行。ミシン台に投げられるパドルよ。

▼月村香

シャンソン
わたしが今キャッチしているのはちよつと古いシャンソンだからうれしくなってキャンディーをほうばるキャンディーということばが宙に浮いて聞こえる遠くではてしなく美しい女のそうじを楽しむ声が聞こ

えてくる

▼高木富子

満ちるために 再び満ちるために 食欲でなく 渴望でもなく ここに やかに満ちるために 朝の荒野を行く 露に濡れた草を踏む 草の傷みに 足裏の傷みに 朝の抽象が宿り光る かすかな翅音に めらんじゅの攪拌と混沌に 刻まれた旋律に 確かな予感が兆す

▼中嶋康雄

百号百字文
紙や電磁気録に閉じ込められた詩どもゾロゾロ口轟く兆漂う啓蟄も過ぎ今宵百の奇貨に詩の触角ゆらゆら口パクパク百足のごとく周囲の小虫小動物などベロベロ食べ始め長編詩などはその醜い怨念の鎌首もたげ幼児を狙い食う

▼中堂けいこ

繚乱ときげよさげよ
百の花の桜木は根方によいどれの男女が首をしめあうその画像の題目に「蜜陀絵擬体」と虫ピンでさされ桜蜜を集めよと虫はピンを外れて桜花にむらがるが男女のむつみが劣情か優情か判りがたくわずかに秘すべき蜜をさす

▼大橋愛由等

が逡巡しているさまをながめながらぼ
スソナルキッソのほとりで河の春
厚雲を浴びながら伏し目
はものか
から歩にちが
これか
歩行す
とき
少年
受する
感よりあういとだのくゆ
受する
感よりあういとだのくゆ
つたゆたに中の延差もちたく

晒しつづけて
匂い立つ！

岩魂に届かせる慟哭に
脱け殻は層群となつて

永遠に揺れて大きく弧を描く香

百の日溜まり
蛇たちの巡礼

▼三谷白水

自選五句。春夏秋冬編

追憶と惜別とあり左向く日傘の女の雛罌粟の花
春愁やほくろにも陰宿るらむ
諦観の流砂で見るとは濃竜胆
老ひ鹿の風聴くやうに立ちにけり
先入観捨てるがよろし冬銀河

▼高橋雅城

カルメンは踊る帆柱堅きこと

夜明来る一〇〇号に来る大且
恋猫やそろそろ知子落ち着きを
富の分配白薔薇蔭さわさわと
夏蓬届け寺岡大人へ
俳優の妙味愛由等桃青忌

▼富哲世

詩について

にんげん状のものが森のきわを走る
(果たしてそれはそれ以上ののだが……)
するとことばと歴史はその渴きの腕を果樹のたわわな翳りに伸ばして
「くも」のなかで何でもないものになつてしまふ
影の時針の響きのうちに

▼御着かおり

仮像

「混ぜるな危険」のラベルは
剥がされてしまつた
ミクストメディアが風骨を

▼寺岡良信

鍵穴

流水を拒んで鍵は差したまま
海市立つ石工の軒消えがちに
夏果ててリラ座の浜に棄てる櫂
満月の火傷が疼く洞窟画
大犬座櫂を燃やして終はる旅

▼黒田ナオ

何万年

死んだり
生まれたり
また死んでしまつたり
生まれ変わつたり
いく度もの
長い長い
生き死にの
輪廻の渦に
巻き込まれながら
いま
ここに
私という
人間

▼岩脇リーベル豊美

モーラ 10x10=100

だるまさんがころんだ
だるまさんはけがした
だるまさんはおこつた
だるまさんはかなしい
だるまさんはひとりだ
だるまさんをおもうと
だるまさんにあいたい
だるまさんとはなそう
だるまさんはいずこに
だるまさんはしなない

▼有時秀記

生きられる時間は少ないという意識が、日増しに強くなつていくが、なお道は遠い。道とは真理の探究だが、それは大切な心象でもなく、単に重要な概念でもない。物と心が渾然と融合する故郷であること、言をまたない。

▼福田知子

猫又のたわごと

「月刊めらんじゅ」は10年で100号！人間は100年で100歳。猫は1年で20歳（成猫）になつて、その後毎年4歳ずつ年取るから20年で100歳。だから「月刊めらんじゅ」の鼓動は、きつと人間の10倍、猫の2倍の速さなんだろうにゃあ！

主観性によって
汲みつくされることは
ない

同じ意味をもつていた
それらは

驚き
発見すること
楽しむこと
生きていること

安いワインを
味わえるようになった

新鮮な戸惑いと
ともに今

六十五歳の私を
想像もできなかった

▼原田哲郎

驚起

夜の闇の中
沈丁花が
匂っている

カンカンと鳴る
踏み切りの音

もうすぐ帰る
家がある

▼今野和代

My Favorite Things

五月の薔薇 夜明けの青
ビリーホリデイ「不思議な果実」
旅の帰りの履き古しのブーツ
朝寝 朝酒 朝湯 朝の夢
黒猫トロ 白猫フェリーニ
片目猫丹下 野良猫ムルソー
みんなあたしの好きなもの

オーホヨソハカナキモノーハ
コノ世ノ始中終
マボロシノゴトクナル
一期ナリー
蓮如さんの「白骨の御文

ナゾナゾ まがり角の沈丁花
みんなあたしの好きなもの

ヴェスヴィオス火山
石川五右衛門
チェ・ゲバラ
ジャリンコチェ 後藤さん
へろへろのバド・パウエル
ライトニン・ホプキンス 吠えるコルトレ
ン
みんなあたしの好きなもの

▼木澤豊

都市の草

草というたましいがあつまるころ 揺
らぐところ 休むところ そこから来
るひとをへつれ〜というのでしようか ひ
つじが一匹 午前3時の林から 枯れ葉
の匂いをまき散らし 遅れてもうしわけ
ないと風があやまつて 子どもには聞こ
えない美しいうた声とする

☆
その花の香りがきつくて 路地を歩いて
雑踏の声を聴く らちもない 隙間のな
い音が 不穏な安らぎが わたしを 追
い立てて通る 開かれたままの窓に 住
むことを拒否している影き だれのかた
ち だが 破壊しに とカラスが飛ぶ
ゆうやけ こやけのつきあたり

☆
書かれた海 書き込まれた海 カラスガ
イの白い傷が 恐竜の影に見えて 夜が
くると 竜骨のしたで だれかが うた
っているのかなあ むかし 「ミュの糸」
という存在しない島の楽器を描いた い
まは いまは 薄暗い書齋の窓辺で。
弾いてみると 団地の夕焼けばかり

☆
何のことはない 墓の向こうは海で こ

手品師 昼下がりの情事

連れ込みホテル ぼんくら
三角公園 盆踊り サルサ
猿まわし 綱渡り 赤蜻蛉
ジェット飛行機 イカ釣り舟
ウイスキーボンボン 煙
みんなあたしの好きなもの

犬にかみつかれたり 蜂に刺されたり
男に振られたり 雨に降られたり
サンザンのくちやくちやヨレヨレの心と身体
で

街をほつつき歩く時
あたしはただ大好きなものを
おもいだす
そしたら気分はちよつとだけ灯る

ターミナル 風呂屋の煙突
樞天使 落下傘 アプサン 金魚のあぶく
聖フランチェスコ教会の鐘 マントヒヒ
ビー玉 夏草 虚無僧
ブリキの太鼓 無口な職人さん
満月の道 オリーブの葉裏
みんなあたしの好きなもの

うわーん うおーん の涙も潤れて
もう帰つてこない人の面影が
ぐるぐる酔っぱらいのあたしのまぶたに
メサイアコーラスの残響みたいに
甦つてくるひとりぼっちの夜

☆
これまで波音が聞こえる 小屋の窓を開け
て すぐに閉めてしまふ 制服の女が
本を管理していた いつか あれが読め
るようになるつて ほんとうかな とそ
の書物 には書かれていた これより向
こうには 空と雲しか見えないとか

☆
草を背なかいっぱい背負った老人の写真
に心引かれたときがあった それは染料
の材料だった 煮出した液は足下の鍋に
ひかっていた 書かれなかった一冊の本
わたしがうつつていない一冊のあるぼむ
というのが ほんとうに存在したわたし
の姿だったのかもしれない

☆
それから 彼女の物語は いくど書かれ
たのだらう 壊れた堤防に 打ち寄せた
石みたいに ただ落ちているが そうだ
ものを語るといふのは 浮遊することば
たちを聴くといふことだった 30年前に
オルの物語を書いたことがある 書くとい
うことは実現するということだ

☆
いまは幻日 古い書棚に 破れた表紙の
アルバム埃の匂いのなかで 存在したこ
とのない わたしが笑っている きょう
は風の強い日である 柳田国男の『遠野物
語』に 神隠しに遭つた娘が風の日に姿を

あたしはただ大好きなものを
ひきよせよう
そしたらこころはちよつとだけ明らか

▼高谷和幸

ひやくと生きている人々が住んでいる。ひやくは百一からひとつ足らないからリヤマの毛皮でくるんでいるが壊れていくので裂け目にテオシンテから作つた糊をすりこみ一緒にとぎどきは酒をのみ愚痴を聞いてもらっている。

▼北村虹曳

一羽の鳥が羽ばたき空を後退する
地表に無数の波紋が現れ、中心に収束し
生まれた礫が厚い雲をめがけて飛び立つ
……雨

終末の緩みが生涯反芻の悪夢を呼び覚ます

▼安西佐有理

みずのそこであうずくまっていたら、あたまのうえをながれていく、しろいいのち(だったもの)のかげら。「十の十倍の、おとむらいとおいわいなです」といったのは、あなたか、わたしか。てりかえすひびきをのみこむ。

みせるというはなしだった サムトノバ
バと呼ばれる

☆
長い鉄橋が かすかに揺れているのが
足の裏から伝わってくる 川の橋をわた
る ゲリラ兵の姿を 夢見た時代 あ
の幻の詩集 わたしが会った あらゆる人
の名前が 書かれている場所は ここ
にある あるはずはないのだから どこに
でもある ノートだ

〈編集部から〉——「月刊めらんじゅ」が100号を発行するにあたり、「百号百字文」を特別企画いたしました。百字内外で、いままで本誌に執筆していただいた皆さんに対して、作品募集したところ、23人の方から、詩、短歌、俳句などさまざまな形式の作品が集まりました。「月刊めらんじゅ」は神戸で発行しているささやかな詩誌です。これからも、この都市を拠点として、文学的営為を重ねていきたいと思っています。今後も、本誌に注目していただきますようお願い申し上げます。(編集担当・大橋愛由等)

和田悟朗句回想

野口裕

夢の世を出でてこの世は木瓜の花

二月二三日に和田悟朗が逝去した。肩書きめいたものを記すと、奈良女子大学理学部教授を経て同女子大名誉教授、俳句は高柳重信の「俳句評論」、赤尾兜子の「渦」同人を経て1992年より「白燕」同人代表。2010年「風来」創刊・主宰、となる。愚生は、「風来」には参加していないが、和田悟朗主催の句会「もとの会」の司会と編集をやっていた。司会をやり始めてからの年数は十年弱だろうか。

だが、司会以前から句会には出席していた。ふた月に一度の句会とは言え長くなると、和田悟朗の句の特徴も次第に承知してくる。その理知的かつ軽快な句風は、広く知られているところでもある。

春の家裏から押せば倒れけり
わが庭をしばらく旅す人麻呂忌
抽象と具象のあいだ神戸冷ゆ
人間であること久し月見草
歓声は沖より来たり風車

一句目、映画のセットを思い浮かべれば句意は明確だろう。庭に出て植木の生長を見ているうちに遙かなる万葉集の世界に遊ぶ二句目。林立するビルと幾何学模様と山麓の対比。ホモ・サピエンスとして命ながら得ている不思議に目を見張る四句目。「玫瑰や今も沖には未来あり」(玫瑰は、はまなす)と詠んだのは中村草田男であったが、未来からの風を受け止める風車の存在は向日性に溢れている。

最近出た俳句雑誌「俳句界」では、和田悟朗特別作品二十一句を目にした。最終句は、

よつて、聞き手の注意を引く係り結びの物言いが行き着いた現状での姿でもある。というような話は、大野晋の本を読めば書いてある。

他方、切字の「や」は、五七五の中途に置かれるにもかかわらず、五七五と次の七七を切る働きをするものとして連歌・俳諧の中で重用された。そして使用される内に、次第に五七五の内部を切るものとして意識されるようになってきた。その点で、「や」も五七五内部で係り結び的な働きを有していると言える。というような話は、川本皓嗣の本に書いてある。

「は」と「や」は、似ている面を有していると言える。しかし、俳句の歴史の中で「や」が多くの作家によって用法が練られてきたのに比較して、より一般的な会話にも使用される「は」の方は五七五においてそれほど使用されたわけではない。

「や」が、もともと疑問をあらわす語だったことから、容易に反語と見なされるのに対し、主題の提示である「は」の方に疑問の働きはなく、そのままでは反語と見なされにくい。「や」が融通無碍に上下をつなぐほどに、「は」が五七五の上下をつなぐことはできない。

だが、読み手側に馴れが生じてくると、五七五の中に「や」があれば、読者は安心して「俳句」の印が押されたものとして受け取る。五七五が「俳句」であるかないかのぎりぎりを狙おうとしたときには、「や」の存在が邪魔になる。

一見何気ない物言いに見えた五七五が、リズムに乗って脳内に棲みつき、ふつと何かの拍子に意識に舞い戻ってきたとき、現実の風景が一変してしまう。それほどの効果を一句に期待するときに、「や」よりも何気ない物言いである「は」を五七五で働かせることはできないか？

作家としてそう考えても不思議はない。そのせいかどうかは定かではないが、「は」を多用する作家が次第に増えつつあるように見える。そうした使い手のひとりが和田悟朗であった。

日輪は春の軌道を怡しみて
初蝶は純白見せてわれに来る
大往生遂げしは花の静なる日
春雷は時間の粒として過ぎる
頑固とはさびしき固態春の風
噴水の始めは天を驚かす
トンネルは神の抜け殻出れば朱夏
紫陽花のやたらに咲くはかなしけれ(紫陽花にオタクサとルビ)

絶句と考えてよいだろう。

下敷きとしている永田耕衣の句、「夢の世に葱を作りて寂しきよ」も、織田信長の好んだ幸若舞の一節、「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり」を彷彿とさせながら幸若舞のはらむ高揚感を寂寥感で打ち消して皮肉であるが、悟朗句は木瓜の花を配ってさらに皮肉な構造を取っている。

「世を出でて世に」の堂々巡りも謎めいて響く。彼の元気な頃の、少年のようなはにかみを見せながら軽くほほえむ姿が、この句の奥からは浮かぶ。理知的・軽快・ウィット・皮肉と言った形容と、句が示す驚きや発見を加味すれば和田悟朗の世界は一応理解できる。

それは、彼が科学者として行った、水分子の形状に関する研究とも通じるものがある。

普通の液体は、低温になるほど体積が小さくなる。ところが、水は凍る寸前の摂氏0度ではなく、摂氏4度ほどのときに体積が最小になる。この性質を、彼は水分子の形状に着目して説明した。

水分子のような、くの字の形状のものが整然と並ぶとくの字の開口部がスペースを取って体積が小さくならない。少し雑然としているときの方が、くの字の開口部に他の水分子が入り込んで体積が小さくなる。本人のエッセイによると、和田モデルと呼ばれていたようだ。

後年、南部陽一郎がノーベル賞を取ったことで有名になった、「自発的対称性の破れ」の例として、水分子の形状もよく取り上げられる。水分子の形状のせいで、摂氏0度ではなく、摂氏4度付近で体積が最小になることも、「自発的対称性の破れ」の帰結として出てくる素粒子の性質と関連づけることが出来る。

句会で、和田悟朗自らがその辺の事情について話したことがある。司会をしながら、やはり和田悟朗は「自発的対称性の破れ」を意識していたかと思いつつ聞いていたことも、なつかしい話になってしまった。

技法的には、近年の俳句作家に特有の助詞「は」の使い手ということが上げられる。

助詞「は」は、主題を提示する働きを持つている。語順を逆転させること二階には二階の畳夏休み

最終句集「風車」の第一章八十二句の中からこれだけの量が拾い出せる。「は」の多様には、できるだけ簡単な描像で、複雑多岐にわたる世界をすっきりと把握すること。なおかつ、そこに観察者としての作者の感慨を秘めることが出来ればよい、という思いが託されているはずである。

しかし、以前からどうにも腑に落ちないことがあった。たとえば、彼の若い頃に、

秋の入水眼球に若き魚ささり

という句がある。水死体の眼球に魚、おそらくサヨリのような細見の魚、がさざつているイメージを句は形成している。印象鮮明ではあるが、軽快とは言いがたい。言いがたい何かを秘めている。その何かは後年の句では見えにくくなっているように思える。彼の俳句で見えにくくなっているものは何か？それが最近ようやく見えてきた。

通夜に参列した際に聞いた話だが、最後の東京行きでは所用が片付いた後に、一人で第五福竜丸展示館を訪れたようだ。そういえば、鹿児島に行つたときは知覧特攻平和会館を訪れたと聞いている。

いつ頃に書かれたエッセイだったが忘れたが、大阪で空襲があつた際の出来事を彼は記している。そのエッセイによると、空襲警報が鳴つたときに、彼はとある防空壕に避難した。ところがその防空壕が小さく、後から避難してきた親子連れの入る余地がない。見ると、小さな子供たちである。大学生だった彼は観念し、自ら防空壕を出て親子連れをその中に入れた。防空壕を出て、歩き始めた彼に爆弾が襲ってきた。

しかし、なんとその爆弾は彼ではなく、防空棒を直撃した。彼が振り返つたときには、防空壕は劫火の中にあつた。彼にとつては衝撃の出来事であつただろう。

戦争中、理科系の大学生は招集されることがなかった。彼が知覧を訪れる理由もおぼろげながら推測できる。同級生が死に向かい、自分の命は長らえているからだ。さらに、それを極端に象徴する形で防空壕の事件があつた。

このような体験を経たしまうと、戦争が終わっても、生と死について考え込んでしまうことは容易に想像できる。

若書きの入水の句は、海に沈んだ特攻隊員のイメージだろうか。そう考えた方がわかりやすい句ではある。

後年、彼は阪神淡路大震災に出会い、住み慣れた神戸から奈良へと移らなければならなかった。地震の際の句は、

寒暄や神の一撃もて明くる

ここで、「神の一撃」は神学用語の応用で、因果応報の意味合いはない。天地創造後に神が世界に手を加えていないのか、手を加え続けているのかは、中世神学の大きなテーマだったようだ。手を加えていないという主張を端的に表す言葉が「神の一撃」であった。天地創造の際、神は一撃を加えただけであった。後の世界は神の設計通りに動いて、神は一切の手をその後加えていない、とするものである。

句に戻ると、「神の一撃」で象徴されるのは人が抵抗し得ない荒ぶる神のイメージということになる。どことなく、防空壕の事件と対比したくなる面を持つ。

理科系の学生として同級生の死を見送り、防空壕の事件があり、戦後も俳句の師であった赤尾兜子の自死に出会いと、自身が生きながら得ていることを考えざるを得ない状況にあった。しかし、自らは見送る立場に否応なく立たされる。それが彼の独特の句風を形作る上で有効に作用した。そう考えると見えてくるものがある。

以前、私は

多時間の林を抜けて春の海

という句について、多時間を、木々を含めた多様な生物がそれぞれに持つ時間と解釈した。

それが間違いとは言えないが、一個の人間が持つ多様な想念が含むさまざまな時間と解釈しても良さそうだ。あんなことがあり、こんなことがあり、今の自分が春の海を目にしている。うわべの穏やかさであるが、それもまた良し、の心境であろうか。

◆朝のミミズの廃線電車

中嶋康雄

最悪の朝はミミズの尻尾の先で悶えている。サンドイッチの具はミミズです。ご飯はミミズの卵です。卵は孵りそうです。孵ります。小さい小さいミミズです。白いです。いつ普通のミミズの色になるのかと破れかぶれ。沈黙の絶叫を繰り返していると電車が来る。ミミズみたくに体をくねらす電車です。普通のような急行です。急行が駅に停車しすぎて、メラメラ怒りの時間割は似非訓練です。電車を降りると駅が慌てて出てきて足を食べようと口を開けようとしてますが。口がない。口はまだか。口は用意なしか。口は消化され、詣でませんね。擦りつけるミミズの体が、摩擦でほんのり熱く、気泡が開く無数。養分の改札口で切符がニョキニョキ伸びてます。切符の粘着の蔓がモゾモゾと口に入ってくる。息ができない。息ができない。ミミズの盛り降る夜の痔、苦戦。朝は暗い。どぶの闇が朝を乗っ取り。演奏会の笛の音は幽かです。おば

正直、和田悟朗がこれだけいろいろなことを考えさせてくれる、とは思ってもみなかった。書けば、今書いている量の半分ほどだろう、と考えていた。ちよつと甘かったようだ。近々、和田悟朗全句集が出るという。今はそれを楽しみにしてこの稿を終えることにする。

死は来たる

堀本 吟

真夏日の国もあるてふ寒波かな
砂つぶのひとつに春も来たるらん
チョコレート美味しかったと声遠し
風来たる和田悟朗氏を攫うため
死は来たるしずかに屋根の反る二月
二月二十三日夕べ君逝けり
花ふふむこの世の辻に逢うて風
花ふふむ辻に出逢うてともに風
この道に遇うて訣るとともに風
山並めて春の弔意の風が立つ
伊予柑の皮のあぶらの香りかな
てのひらのぬるりいよかん剥きながら
イヨカン剥く掌の濡れて今やるべきこと
おもうことなにもないふりスイトピー
せんせいの笑顔いきいき弥生来る

和田悟朗との一期一会の句会

昨年冬から今年春に、私淑する俳

人二人が亡くなられた。伊丹公子のことは後日に書こう。無性に寂しい。和田悟朗については、晩年の生き様を近くから見せていただいたことがありがたく、在地の遠かった攝津幸彦の場合とはまた違う衝撃を受けている。

その句会では、句会を休まないように、句の合評は良いところを見つけてなさい、と最初にいわれて、それから技術的な指導をほとんどない句会だった。あなたがそうしたいならこういう方向が可能だ、というアドバイスのしかた、と古株の一人が言っていた。人格的にも俳句の動機にも、根っこに強い個人主義がある。その故かどうか、公人としての責任意識は強いが、同人への俳壇付き合いを強要しなかった。「風来俳句会」の代表としての和田悟朗の権利と義務は、いつこの句会をやめるか続けるか、それは自分が決める、ということだったようだ。しかし、それが一番強烈な「しぼり」であった。永田耕衣、橋岡石、赤尾兜子、鈴木六林男、高柳重信、のすぐ後ろに続く俳人としては、第一人者。種々の流れを飲み込んでいるその作風の理解には時間がかかる。

あさんがミミズに話しかけると、ミミズは話を聞くためにわざわざ嫌々もう一人のおばあさんになり、身をくねらす。色魔の色即是空から泡の誘発。電車が、おばあさんに発情する。電車がおばあさんの中で発車する。無人走行の電車だけがニョキニョキ生えます。ミミズの養分が必要です。コップの水が騒いでいる無人駅で、ミミズがそれでも電車を待つて待つて、待ちわびて干からびる。バッタは草を食べる。草は土に生える。ミミズは土を排便する。土を待ちわびる電車は大おばあさんではなく大ミミズに発情するべきです。いやだね。いやです。いやな、いやいや。「よりによよつて、ミミズになつて」なんて言うては、だけでも、この期に及べば、贅沢すぎる。臆病が、うち続けば、どぶミミズも美しい。ミミズの縦縞、虹にも見える。けれど、もう遅いのです。ミミズはもういません。うち続く臆病はコンクリート製だから。コンクリートのちよつとした窪みに溜まった水には、ボウフラぐらいいしか湧かないです。この電車にはボウフラしか乗っていないくて、縦にだけ小刻みに揺れて揺れて、残り少ない空気を消費して消費してパンクして、空気貧乏。その場限りの非生産です。空気貧乏のボウフ

ラがやつと変態するのは切符の蚊で、その切符の蚊を使える電車は、ずいぶん昔に、廃線したんでしたよね、大おばあさん。廃線の切符の蚊が、薄暗い空虚で交尾しています。数にも虚数があるように、蚊にも虚数があります。虚蚊は生き物なのでしょうか。虚数は数なのでしょいか。虚数が実数ではなくとも数学であるならば、虚蚊は生き物ではなくとも生物学である。虚蚊に血を吸われたら人が薄くなる。人は虚蚊にさんざん刺されたら、相当薄い人に萎える。朝の電車、萎え萎えた人の目から涙、涙に虚蚊のボウフラが、出たり入ったり。隣に座る人の目にも移り入ってゆく。幽霊みたいに霞んだ蚊が次々と飛び立つ。目の玉が、蚊が飛び立つごとに薄くなる。半透明になった目玉は虚蚊とミミズしか見ることができません。ミミズはどこにでもいる。手当たり次第、周りを食べては消化して、糞をしている。糞をしては、群れ集う朝、糞からひねり出した廃線の電車に乗る。糞だから廃線か。廃線だから糞か。糞に集うも、情に集うも、朝の傾ぎ。

◆忌日十句 演歌！五首 狂歌！五首

高橋雅城

演歌！ 五首

歌宵越しの銭は持たねえ愛さえも斬ってほろほろ泣く都鳥
半世紀生きてきてみて顧みて崖つぶちだよ人生は
ホテル街出れば七夕泪雨いつの始まり今日を終わりに
さておいてゴーマンかましてよかですか？ だめですあなたい
くつなんですか？
コンクリと俺を貫け放射能 海市はるかにゴジラ革命

忌日 十句

立スチールの束子ごわごわ凍返る
春きざすスバゲッティを巻く手にも
春陰や頭痛の向こう脳がある
國燃えて残る寺山修司の忌
親知らず抜くのためらう二月かな
山笑う時刻山へと置手紙
力学を無視して桜ふぶきかな
何言うもお気に召すまま人麻呂忌
人生を冗談として三鬼の忌
四畳半フォークはいかが啄木忌

歌詠まば心得てるか評論を寺山修司「ロミイの代辯」
書くために死ぬる詩人になりたくも余録のしあわせ一分に生きる
生き死にを書くに託して今日ひと日生きて過ごさむまだ書きたり
ぬ
死ぬるなら書くこともなく生きたとて書くすべはなし地獄と地獄
書くことは笑いにつきる大声に滑稽ならぬ歌ぞ疎まし

狂歌！ 五首 主に野口裕に

◆宝石

月村香

かすかな記憶でその宝石の名をたどれば次の
瞬間首や腕に垂れる長短のブラチナの腕にダ
イヤ胸にルビーそれらに祈りなさいと言うの
ね宝石たちはもうわたしのものでなく未来あ
る者たちをいやすためにあるの今午前一時だ
けれどこうやってちやらちやら動く右手のプ
ラチナを今ははずす時が来てわたしの宝石たち
はわたしとともにもうすぐ眠るの蠟に火をと
もせばそれで満たされる三文判のわたしの心
と身体三分割される主語と動詞と目的語の一
体どれをささげるの宝石って一体何わたしは
明日の朝ひどい寝汗に苦しむのだ

◆聴許

御着かおり

そして干した蜜柑の皮を湯船に放り投げました。
冷えた身が溶けてしまい
歯を食い縛ります。

わずかに霰が降っている朝
猫の寝息に

気持ち流してみると

白く横長の長方形が重なっていました。

「あれは何だったのだろう」と
湯にうなだれて
ユーカリの石鹸を泡立てます。

土ノ上

羽根のように吹かれては巻き上がり
てゆうてゆう

泣いているものがあります。

まい落ちて

てゆうてゆう

てゆうてゆう

降り積モレ

とめどない祈り

その眼差し達に曝されて

蘇鉄の実は蛍光オレンジ

「毒があるんですよね」

大きな葉は揺れることなく

頑なに立っています。

◆昼月

上野都

呼びかわす

聞こえないければ目で

見えねば耳で

かくも軽やかに

真昼の空にも月はあると

見えないほうが痛いか

聞こえないほうが扶るか

枝をつかむ細い足に

血の色も見せず

きりきりと

鳥というものに化身して

辛辣な春に濾され

高い梢に吊るされた贅のかたち

傾く陽を欺いて

ただ 呼びかわす

三月の無辺に沈んだ錘^{つむ}

揺れながら

測りながら

なお

冬風に身をさらし

影を増して

呼びかわす

聞こえるのか

見えるのか

おまえたちに傾く陽の

その一瞬にも

照り返す春の哀惜が。

〈詩人通りより〉19

詩工房の朗読

岩臨リーベル豊美

工房のスタジオ(というくらいの小規模)が、その夕は聞き手で満員になった。年始の第二日曜ということもあって来客も多くはないだろうと思っていたものの、数だけではなくフィードバックもよく、これまでの三巻の詩工房アントロジーを近くE-Book化しようとして出る地元の出版社もあつたほどである。

隔週の詩作の活動は、主にベティナがゼメスターごとに選んだ思索テーマについて、それは哲学の内容を持っていたり神話や世界構成要素のような形而上の、または形而下のエレメントであったりいろいろだが、参加者の韓国人、イタリア人、日本人、そして異なる職業や年齢層のドイツ人がそれぞれのパスベクトイヴからものを観ていておもしろく、冬などは特に向く時刻になると、もう夜の気配が立ち込めていて一日の終わりに疲労気味であったりするのだが、決められた時間内で話し合い、即興に近いような詩を書き(もちろん帰宅後推敲しその後発表する)、90分が終了する頃にはなんだか頭がすっきりしてきて、またそれぞれ自分の場所に帰ってゆくという形をとる。夏だとかちょうど日が暮れかかる十時過ぎで気持ちもよいのだけれど、冬は車の運転に集中する。

実は気が付けば三月も終わろうとしていて、すでに昔のこのように思えるが、今年の一月第二日曜日に詩の朗読会を行った。以前に報告したこともあるかもしれない哲学研究室の元同僚ベティナ・シュミッツ主催の詩工房 Poetische Werkstatt で、朗読会は、その詩人たちすべてが女性が編んだ詩から3篇ほど選び「Blau&Rot - Verwobenes 青と赤織成」として再構成し、章の合間にチェロやフルートの独奏を交えながら全体としては一時間ほどのアンサンブルに仕上がった。地方紙にも取り上げてもらい、これまで同工房で一年おきに朗読会を三回開いているが、学期中には隔週水曜の夜八時十五分から90分限定で集まり、車座になって座禅の際に使うような座布団に坐って詩を語っている詩

ここで何が言いたいかというと、今まで私は人前でドイツ語で講義をしたり研究発表をしたり、言わずもがな完璧ではないが事務的なことも友好的なこともほぼそうやって済ませてきた。それが今回の朗読会ではとくに、普段どおりには通用しないということがわかったのである。プログラムのなかでは三つの詩を朗読したが、自分の書いた語句と文章に咽喉や舌やたぶん身体全体がついていけないのである。おそらく頭の中で構成された表象と発音能力というのか音韻力といえよいかかわからないが、合致していなかったと自覚したのは初めてに近い。つまり身体全体で書いていなかったということである。

『Schnee in der Dämmerung かはたれのゆき』というのがそのうちのひとつで、そこには何を思ったか、読後にネイティヴでも発音するのは難しいといわれるような三行がしたためられ、この朗読者は周囲の人間にいくつか手本を見せてもらい舌が勝手に動くようになるまで繰り返して練習することになった。それは「Die Närrin dankt am Morgen/ der verrückten Intertextualität/ für ihre Eros gefärbte Geschichte. 女阿呆は朝/ 血迷った間テクスト性に/ エロスに染められた物語を感謝する」という部分で、至る所にウムラウトをちりばめ、コやシやウムラウトに続くハやD(=D)といった、成功すれば面白いが自分の舌や唇には無謀すぎたと後悔するような音節が並べられていた。書いたときにも音読しながら選んだときにもさほど意識せず、どちらかというトリズム感を重視していたような気がする。リハーサルは数晩に及ぶ。

る言語は多くはない。このことは、月を替えて考察してみたいと思う。先月お知らせしたように翻訳も苦手、また朗読も能力不足となると、詩人通りはどうなるのだと思われるだろうが、朗読後ひとりの女性が「あなたの詩を聴いて涙が出そうになった」と感想をくれたのが素直に嬉しく、拙詩原文。

私は普段、ひとからある程度理解されているという確信はあるが、ただ、それはまるでラジオを聴くように音声のみで理解されているのではなく、他の要因、たとえば表情や手振りなどの身体表現や文脈やハンドアウトといったものの、謂わば間テクスト性(クリステヴァでいう意味を拡大させて)の助けを大いに借用することによって理解されてきたのだと思う。

もうひとつ、チヨムスキーの生成文法以来、それ以前にも、やはり語の派生とその発音の変化は強い関連性を持つことは認められているが、それを実感したのがやはり非ドイツ語を母語とする詩人たちの朗読だった。普通に会話する際は全く気にならないが、読むとそれぞれの母語のアクセントが顕著に蘇るのである。韓国語の語感、イタリア語の語感、そして日本語のそれが如実に反映されてしまい、多様性ということがいわれるが、日本語ではそれが何に依拠しているのかと問うと、やはり独自のモーラ(拍)にあると思に至った。促音も長母音もひとつのモーラとして数え

Blau
Die Zeit fließt ins Meer.
Im Vordergrund trennt
der Nagelmond
den gemeinsamen Stamm
von den Göttinnen und mir.

Der Schatten steht nur
immer noch da
zwischen der blauen Erde
und meiner Ferne.

Zeit, oh du Zeit,
dich greife ich nicht
allein in der Hand
oder
zerstörst du
alles,
was ich bin?

◆母

福田知子

大きな落雷の跡に生まれた小さな水たまり
ひらいた掌は薄明りの仕種に似ていた
小さないくつもの水たまり
そのひとつにひらいた睡蓮の花びら
花びらの縁をひと筋の光が通り抜けた
そのとき光が小さく息を吹いたので
それが 母だと分かった

あけの明星が水明りのすぐそばを横切った
時間といういのちの網目
その網目から微かに零れ落ちる淡い光が
母の残りの水量を静かに映しだしている

生と死が同時にひらかれた場所――
父が逝き遠い親戚にあずけられた日々も
軍需工場に焼夷弾が落ちて友人が死んだ悲しみも
代用教員で教壇に立った教え子の仕種も
田舎から神戸に出てきた当初の気苦労働も
夫の女道楽に対する遣り方ない憤慨も
薄れゆく記憶の水明りに鮮明に照らされ

昔のこと 今のこと

いきいきと話す母の饒舌はもう消えたが
「いつ逝つてもちつともかまわないの…」
そう語る母は幸福な童女の表情で
死も日常も穏やかな光で満ち満ちてもう何事も起こらない
今日もソファに凭れうつらうつら微笑んでいる
生と死が同時にひらかれている永遠のその場所で――

◆太る

黒田ナオ

からだの奥にある
暗くてぬくい場所
何かが太る
むっくり太る
生きてる私の内側で
まるまると

胎児のように育っていく
下腹あたりが重くなる
眠たくなる
力がぬける
歩けない
もう立っていられない
なのにまだまだ太っていく
ぷすぷすぷすと
泡立っている
だるくてもう何もする気がしない

まだ昼過ぎだというのに

蒲団にもぐり込んでくんくんと
自分のおいを嗅いでいる
発酵するからだ
におう
つんとしてにおう
ほんのり湿った
豊かな土のおい
汗のおいも混じっている
蒲団の中で
太りながら
湧きあがる

◆ 十字架と車椅子

有時秀記

独り川辺にたたずむ人を追ってきた兵士が、その人に声をかけるのは、川の流が速く、蛇行している川べりである。夕陽に背を向けた人の背後から、兵士は、その人に、かつて住んだ町に戻るよう指図するのだが、その人は耳を貸さずに、はるか川向こうの蜃気楼に視線を向けたままである。兵士は、耳を貸さないままの、その人の背を軽く押すが、その人は、前に少し傾いだけで、依然として対岸の蜃気楼に視線を向けたままである。兵士は焦慮からか、その人の背の衣服を捲り上げる。その背には、白い十字架が現れる。兵士はやおら、隠し持った拳銃を取り出し、その人の背に銃口を向けて、放つ。ドンという音とともに、その人は前に倒れ、流れる川の中に落下していく。

背に十字架を負ったその人の姿は、流れる川に呑み込まれ、たちまちのうちに見えなくなるが、兵士はあたかも任務を果たしたかのように、きびすを返し、来た道に戻っていく。しかし、数歩歩いたところで、兵士は金縛りになったかのように、立ち止まり、動かなくなる。見ると、兵士の前には、百人ばかりの老人が、すべて車椅子に座り、兵士の進路の前に立ちはだかっている。車椅子の老人たちは、兵士が動く気配を見せると、全員が車椅子のひじ掛けをたたき、威嚇するようなしぐさを見せる。兵士はやむなく、拳銃を取り出し、天に向けて放つたのち、やみくもに銃口を車椅子の老人たちに放とうとするが、たちまち金縛りが継続して、身動きが取れなくなる。

冬空

御着かおり

ライチでできたジェラートの色が空を覆う
その雲は煙のようにのっそりとしている
しずかな

白木蓮の木では
見逃しそうになる程にまだ小さく
けれど産毛を生やし尖った芽をつけて
花の支度を休まない
煉瓦敷きの歩道からマーキングの匂いが
冷えた空気を連れて鼻に入ってきて
忘れられたこども用の乗り物は横転し
落とされた片方だけの手袋は踏まれている
竹むボールがひとつ
それから
花壇には山茶花の花が咲く

はるかかなたに
ハレーションを起こしたような叢の
白く放たれたなだらかな台地があり
その空を鳥が飛んでいるのだろう

(「冬空」月刊めらんじゅ 9号より全行引用)

この詩をはじめとする御着かおりのこのところの詩を読むと、漠然と、フォービズム、野獸派というようなことを思い浮かべてしまった。フォービズム、野獸派というレッテルは絵画の歴史上そう呼ばれてしまった画家たちをひとくくりにした呼び名だが、絵画の調和的表象の歴史に不協和音を鳴り響かせるという意味では、まさに野獸であったかもしれない。この恣意的な連想は、この詩の特徴や本質を美としてよく言い当てるものではないだろう。ただ、その詩が、節操や規範といった外部の統一性を破り、独自の

そのとき、一羽の鳥が上空を旋回しながら、フンを兵士に落とすという光景が現れ、車椅子の老人たちは、全員で喝采する。空から落下したフンは、フンのようなものだった。が、しかし、兵士の頭に落ちたとき、火花を散らし、その頭をこなごなに破砕してしまう。フンは兵士自身が十字架を背に負った「その人」に放った弾丸であり、数分前まで、川べりにたたずんでいた「その人」は、空を旋回する鳥に変容して、瞬時ののち、天の川で、鳥となつて、兵士を滅ぼしたのである。白い鳥の背には、金色の羽根が十字に生えて輝き、車椅子の老人たちは、兵士が破砕されたのち、十字の形状に隊列を揃えて、「その人」であった鳥に向かって、いまは「かの人」という呼称がふざわしいその鳥に向かつて、快哉、と唱和する。

ただひとつの謎は、これらの光景をひそかに、しかし、確かに見ていた眼差しが存在していた、ということである。兵士が「その人」に銃口を向けて弾丸を放ったときに、恐れおののき、その場から逃亡した眼差しの「揺らぎ」があったことも確かである。したがって、十字架と車椅子と兵士を取り仕切っていたのは、眼差しであるが、眼差しの「揺らぎ」は、その場から、つまりは眼差しが演出する場そのものから、逃亡したのであり、その行くえは蜃気楼の彼方へ消えて、知ることができない。

調和を図りながら、あえて表現することの内なるリズムや風景へと向かおうとしている姿勢の直観的な描きかたのひとつとして、たとえばマチスやドラランやルオーの表現主義に近いそれを、場違いに思い重ねてみたくなつたのである。

これは視線の詩であり、その視線の先の世界へからだごと分けいる、参入の詩である。空へ向かい空へ放たれて終わる一篇の詩の視線はまず、欲求の日常性と切り離されることのない五感と照応しながら、雲の様態へと向けられる。(第一連)。

しずかな世界に立つたからだは(二連)、
一本のしずかな樹の竹まいのなかに息づいている自然の休みな
い営みに気付く。そして焦げ臭い猫の尿の臭い。身辺を包むよう
に届いてくるそれはまた、休まない、何気ない、この世の営みの
持続のしるしのようなものである。ここには、どこか彼岸にまで
届こうとする、いのちの暗示の手触りさえおぼえてしまう。冷え
た空気を連れてやってくるマーキングのにおいと、謂わば現実
が世界として露わになる究極の表現である。(第三連)。

そして視線は人間の痕跡へと展がる。日々の、にんげんという、
たくさんの悲しみと喜びに紡がれるであろう物語を孕んでいる
痕跡。『それから』(この視線の振り方がいい)、それから視線は花
壇の花へとおもむろに移る。花の企て、花の配置、それもまた親
和へと投げ掛けられた、ひとびとの生活受容の、生きる証しかも
されない。その風景は、地上の目が行き着いた此岸の場所だ。(第
四連)。

そして意識は日常を離れることなく、この身の痛みを生きながら、
地平線の方へ、空漠の空の方へと向かう。それは同じ空であ
つて、地上の目で見上げた最初の空より広い。その空の広さを横
切る、鳥のイメージ。これは幻視なのか、それとも幻視と重なり
あつた、未来の鳥へと現実化する、記憶のなから現れた鳥の姿
だろうか。こうして視線は空間へと解き放たれていく。こうして
響きと印に満ちた世界への眼差しは、空そら・くうへ届こうと
しているのかもしれない。(最終連)。

すぐれた詩というものはみなそうであろうが、ここには謂
わば取り替えようのない、にんげんの尊厳と呼ばれるべき痛
切な生きる思いが、祈りにも似て、籠められているように思
う。

富 哲 世

ひ と 言 詩 評 3

◆春分

岩脇リーベル豊美

曉に染まる東雲に霞棚曳く天香久山と酷似の砂山が
旧米軍兵舎の廃墟を背景に生起し
漸くの春を分けて不自然な弧を描いている
久しく世界を仕切っていた柵越しに目を遣ると
敷地内を血管のようにめぐる路上に
かつてヴィクトリーパークと呼ばれていた場所を
トラックとショベルカーが砂埃をあげて疾駆する
南の山裾では生まれて間もない鹿や野兎の跳躍が見える
平定せよとの命を受け
十年だけ先の人類幸福を祈り派兵は行われる
空爆の起源は愛と勇気だと信じていたから
バラックの入り口に旗竿は立てられたままだ

◆命題くさわぎくる光もあれかし蟹の海

大西久代

蟹はどこで蟹になるべく
定められたか
水のうつりが甲羅のうえに塗りこめられる
その眼は幾万の波音のかなたを見通したか
遠く人の手から手へ
全き善きものとして尊ばれ
震える声も漏らさず
時の無窮を生きつづけてきた
その夜 テレビ画面からひとつの言葉が
矢のように胸に迫ってきた

「カニであつてカニではない」
厨の片隅に置かれた水槽
透きとおる水底にはひっそりと鎮まる
蟹たちがいて
宿の女将は客へ饗するため
いくどその手で蟹を捌いてきただろう

毎日狂うことなく午前六時に揚がり午後五時には降ろされ
る星条旗に
路肩に車を停めて士官の父と無心に敬礼していた少年は
今頃どここの戦闘地にいるのだろうか
国境線を引き直したころは連日殉教の半旗が掲揚されてい
た
新たな仇敵を造りあげて立ち去ってしまったから
もう谷間にトランペットの旋律が響き渡ることはない
壮大なモニユメントの開拓事業が始まる
いにしえのことは知らぬと見取り図の春の野には蝶が舞う

あおい水のしたたり
白い割烹着の内を高鳴る鼓動

包丁を入れようと押さえこむ
刹那 蟹足をあわ立てて暴れまくる
あたかも今まさにこの身が
血塗られることを知るかのように
激しく抵抗するのだ
女将はそつと蟹を水底にもどす
ひえびえとした水のくらさ
逆にまな板の上でいつさいを
悟りきつたように身をさしだす蟹もいる

カニであつてカニではないもの
荒れる冬の日本海
海のふかみで
カニはどこではじまり
どこでおわるか
旅のはじまりはたったひとつの水の高まり
人間の手のはじまりが
ひとつの種の危機のはじまり
であるとしても

今日のさまよいも解けわたしは
罪深く白く豊満な極上をふくむ

◆ 痕跡

大橋愛由等

鳥たちが
沈黙を運んでくるのを
待つ日だが
着地するそこは
痕跡さえも
遮断されていたことは
知らされていなかった

剥製まで
送れるかもしれない
立つことが
お好みなら
立つていよう
ふたつが
いいというなら
ふたつで
いることにしよう
〈わたし〉は
いずれ
月葬される
中也帽を
かぶったままで

アルケオプテリスの樹下
ただ待つている
いつまで

壁になんども
〈わたし〉は
塗り込められていた
他者から

待つのだらうか

語りかけられないよう

始源をのぞいて
だが

気遣いをする女たち

来るといのか

かぶったままで

朽ちた教会堂

単色の日だった
単語で語った

仮病の神父が

ペルソナを

二月の井戸を

ざつくり小分けして
妣に贈ろうとした

周回する

パラフィンで

きつと

包めば

失くした

ひとりごとの

ままなのだ

◆ 春白縷述

中堂けいこ

ふりしきる白い粉はいよいよはげしくなり、この冬を越したあたり、明け方に目覚めの首を刺すような気配がうすらいで、だが入れ替わりにけぶる匂いが漂うと、白い粉の季節がやってくるのだ。町も村も白い霧状の靄に沈む。水蒸気の霧の湿り気のあるうすらかさとは異なる、ねばりつく重さのある靄なのだった。しかし外はいつものように朝の出勤の男たちや登校の子供たちが道を行きかい、大通りでは定期バスやトラックが走っている。もちろんヘッドライトを点けてもせいぜい前の車のバンパーくらいしかみえないので、ゆるゆるの徐行運転で人々もすっかり承知しているかのように信号機や横断歩道をさぐりながら歩いているのだった。

わたしはいつものように河原に下りて水の流れに逆らいながら踏み慣らした雑草の茂る土手下を歩いている。白い靄は上流に向かってさらに濃くなりわたしの先を歩く犬の姿さえ見えないくらいだ。手のリードがピンと張って犬は先に急いでいる。リードは巻き戻しのバネが付いているので犬が立ち止まるとつながる緩みつると巻き戻し、犬の尻尾がみえてくる。嗅覚が勝っているので霧など平気なようだ。犬がふりかえってまだ散歩を続けるのかと問うような仕草をしたが、かまわずどんどん歩いていった。白い粉は西風が吹きはじめるとこの土地を覆うのだった。特に害があるわけでもなく呼吸器系に病変を生じるわけでもない。白い粉はゆつくりと地に這いしばらくして消えてしまう。わたしにはけぶるような匂いがするのだが、犬さえもそれには反応しない。ふいに頭上に黒っぽい橋が現れその下をくぐると、あたりはいっそう真っ白になり足が先に出せなくなる。背後から朝日があたって前方のもやにわたしの影がほんのりと浮かぶ。たよりなくうすぼんやりとした灰色のわたしはわたしの行き先をふさぎ、ふさぎ、しながらわたしは足を一歩ずつすすめるのだった。犬はリードをゆるめうしろからついてくる。いつか来たことのある風景を今はまたおもしろい出そうとしながら、この先を確かめずにおれないのだった。

◆四月

寺岡良信

星の狼藉は遠離つたから
鍵は
外したままにしておかう
叶はなかつた約束に
夜明けが
嘲りの波音をとどけても

沖から若い馬たちが顕れて
紺を競ひあふ四月まで
私はわたしの幸福を
稚い模様を施した
抱卵の器に容れておかう

鍵穴は転生の通路

水仙を翳らせる潮に
風も

わがままな女神も
嫉妬する

◆ねの位相

高谷和幸

*河川敷の玉蜀黍
スイート―青い空

―コーン
どこだろう
菜の花が咲いてるな(一)
とてもたかいところから
とてもくらいから

―の家族の
―分節化不可能 (naな継続的意味―
すぐにではあるが
こえ―を

すこしずつうたう
きびの(あなたの
スイート・コーン
ね(…:またも首(ie
死んだ子供の笑顔のね(一(一)
ね―もとがからいから

昨日をたべた
たたみかえすきのう
―から
オレ(一)くらい
消えないよ

* * * かりそろえ

玉蜀黍の粒々があたまになった。そのあたまと
あたまの隙間||カルラの包布(ファルド)が同
じ位相で振り向いたように思えた。一瞥と言え
ばよいのだろうか。あらかじめ稲妻の光る位置
に見えないドアが一瞬にひらくように、それは
裂け目の(いつも過ぎ去つたわたしたちが先立
つてそこにある)ようにあらわれた。その位相
は声が力を溜めていたが、石の上に描かれたな
にかの設計図はいまだに語らないでいる。並列
に無限に続く―も―の「も」ではなく、あ
なたとわたしの、―と―にあたる不確実な
時間||特別な日本語のサイト・スペシフィック
な連続性に思えるこの「と」。むかし、危機に見
舞われた国家がこの―と―の混淆する南島
の砂浜に穴を掘つた。穴はかりそろえた首と同
じ位相の隣にあつた。
虫がわいたのはそのあとの稲光||編集台のうえ。

◆ 雑草考

大西隆志

太郎は草だった
次郎も草だった
湿潤な土地の始まりに
クシヤミをこらえながら
ステッキを手にとぼとぼ歩くのは
ドテラを羽織った詩人
ステッキの先で素敵な線を引く
ぬかるんだ泥に足をとられないように
雨雲が流れさった空に
練習がてらに
横線を引いてから調子をつけ
蚯蚓の痕跡も描いてみる
太郎も次郎もまだ生まれてはいない
長靴を履いているので
なかなか進まないが
泥田にステッキを差し入れる
一気に字をふる
痣は肩にあるが、地に名前をつける
身体が震えるので
足を踏ん張ってみたが
どうしたことか大地が小刻みに揺れていた

日が差してきた
波が川から海からもやってきた
砂浜で消された恋文は
どうしたことか砂に流されてはいなかった
言葉の記される風土から
詩人は離ればなれになる家族をうたった
芽が出る一瞬を待っていた
祝いの季節を吟じ
文字は風景をうみだした
太郎は泳ぐ草で
次郎は走る草だった
立ちすくむ草の文字がのたうつ
別れを記した旋律を響かせて
あらたな草で繁茂する
場所を求めていく
散っていく

◆ 魔法

富 哲世

ちくわの焼ける福田港にたどり着いて
(とわの鳥?)
還元的血中アルコール濃度と天体の温気のせいで
ほとんど朦朧体となりながら
さよならというふうに
みんなにつられてよろよろと周回バスにまたがる
放哉の島
ゆうべを亡くして苦しくするものはひとり
見えない手を繋いで
蕩尽する山海の光となつて眩いまだらの浦へなだれ込むと
山あいの丘に今はまだおとなしい
白い魔神の巨塔が現れ
虹を背後に石の巖を歪ませながら
何を祈るといふこともなくがらくずれ落ちるそのときまで
動き出す今を待ち受けて立っている
かわいそうに
しまい込まれて
みんなどこか病んでいるのだ
陽に炙られた
海の見えない庵と墓地へと向かうアスファルトの途上で
わたしたちもいない
放哉もいない
詩人が猫のたましいを呼び寄せる影絵で
遊んでいた

安保条約の再改定がさしたる抵抗もなく終わったあとだったと記憶しているから、一九七十年か七十一年であろうか。寮の友人の部屋のテレビが上方艶笑落語の特集をやっている、桂米朝、笑福亭松鶴、露の五郎といった師匠連が一席ずつ小噺を披露した。その米朝さんの噺をいまでもよく憶えている。

舞台は枚方あたりの淀川に面した集落。大根を商う舟が霧をかきわけて近づいてくる。それを呼び止めた男が、大根と自分のモノを比べて自分の方が小さかったらすべて買い取ろう、大きかったら大根を置いて行けと言う。大根売りが一番大きな売り物を出すと、男、おもむろに前をまわった。南無三、勝負は一瞬のうちに決まり、泣きべそをかきかき舐めを解く売り手。男の女房が船を呼び止め、「もーし、あんさん、すんまへん、うちの主人がこないな転合して。大根みなお返ししますさかい、戻つとくなはれ」大根売り、戻りかけたが、ふと漕ぐ手を止め、「行たらいかん。舟まで取られる」

よく出来た噺である。米朝さんの口演からは、冬の川面を灰色に覆って流れる朝霧が身を切る冷たさで描かれ、零細なあきんどの売り声、櫓や櫂が枯蘆を分ける水音まで聴こえてきて、その淡い詩情がこの噺をバレンタ特有の露骨さから救っている。先週金曜日の朝刊で、私は米朝師の死去を知ったが、端正、品格という新聞の褒め言葉から最初に紡ぎ得た記憶が、四十年以上も前に観たこの番組だった。

米朝師の思い出のうち、私と同世代の人たちとの共通話題は、高校生の頃ラジオ大阪から流れていた「題名のない番組」だ。桂米朝、小松左京という博覧強記を絵に描いたような出演者が、リスナーの投稿をもとに古今東西にわたるは、中学生だった私にも為にする言いがかりとしか映らなかった。らなかった。

年譜によると、米朝さんがホール落語を本格化させるのは一九七一年のサンケイホールからで、演目はご自身が復元した『地獄八景亡者戯』だった。地獄の寄席は物語した名人上手が金看板をつらねていて、亡者が桂文団治、五代目松鶴、二代目春団治、桂米朝（四代目）と読んでゆくと、桂米朝の名がある。「桂米朝という噺家はまだ生きているのちがいますか」「よう見てみなはれ。横に近日来演とありますやろ」

このギャグに聴衆ものちにラジオで聴いた私も爆笑したが、米朝師匠が逝去したいま、うたた感慨を禁じ得ない。その後私は主にラジオやレコードを通して、『たちぎれ』『百年目』などの大ネタに親しんだ。その船場言葉や花街の言葉の洗練された味わい。米朝師は古い言葉をただ復活しただけでなく、その繊細な遣い分けによって主人の鷹揚な人柄を、番頭の一徹と忠義を、丁稚の軽忽さを、若旦那に懸想する女たちの哀歎を、商都大坂の息吹きとともに、くつきりと浮かび上がらせてくれたのである。人形浄瑠璃が栄え、木村兼葭堂こと坪井屋吉右衛門の博物サロンに天下の好事家が蝟集し、懷徳堂が山片蟠桃ら優秀な町人学者を輩出した大坂の、鬱蒼たる文化のさわめきを、師の噺はその背後に負っている。これらが教壇から語られる学者の講義なら退屈だろうが、落語という笑芸の舌耕の合間合間から聴こえてくることに、代え難い値打ちがある。芸を極めるというところは、その緻密な考証を含めておそらく命懸けの行為であろうが、米朝師はそうした気負いを感じさせ

寺岡良信

夜の調べに寄せて

桂米朝—思い出のままに

人事万象を縦横に語ってみせる構成で、投稿者には高校生が多く、学校で習ったばかりの古典のパロディもどきを競い合って壮観だった。「死せる孔明、生ける仲達を走らす

という『三国志』の故事成句を私が見つけたのも、この番組である。友人のO君は番組の熱烈な信奉者で、『徒然草』にある「猫股」のパロディが採用されたこと、学校に来て誰彼構わず吹聴していた。ラジオと言えど、芥川也寸志が司会する音楽番組のゲストとして米朝さんが出たこともある。芥川の「落語以外のことは一応喋れるのですが」という挨拶に対して、米朝さんが「わたいたいも、音楽以外なら何とかなりますねんけど」と返したのが大層可笑しく、ブラームスの『ハンガリー舞曲』を採りあげて、芥川が、ハンガリーのいろんな民謡を寄せ鍋のように炊き合わせたものだと言えど、寄せ鍋を指揮棒でつついてるんですな」と応えたのにも笑わせられた。

米朝さんの落語を聴き始めた一九六十年代の前半は、まだ上方落語の隆盛前で、テレビの演芸番組も漫才が主流であり、落語は十分くらいの放映枠しかなかった。そんな限られた枠の中で、私は『犬の目』や『看板のピン』や『始末の極意』といった噺を聴き、若かった米朝さんの話芸に魅かれはじめた。『始末の極意』では、鰻の匂いで飯を食う主人公に匂いの嗅ぎ代を請求した鰻屋を、銭を掌中でチャリンチャリンと鳴らして音だけ持っていけと追い返すくだりなど、米朝さんが演れば実に粋（すい）で、その頃読んだ、上方落語は身も蓋もない欲得づくめのリアリズムが嫌だと中傷した加太こうじの論（『落語 大衆芸術への招待』）

ることなく、洒脱に演じきった。司馬遼太郎はかつて「私は上方落語の不毛期に育ち、成人し、人生の晩年になって米朝さんという巨人を得た。この幸福をどう表現していいかわからない」（『以下、無用のことながら』）と綴って、愛着と畏敬を吐露したが、その血の通った感情はいまあらためて、多くの人々に共有されているはずだ。米朝師の追悼番組でNHKは『本能寺』と『胴乱の幸助』を再放送したが、これらの噺で、巨人の演じた歌舞伎、浄瑠璃は余技を遙かに超えている。『本能寺』は、歌舞伎の所作そのものを笑いの視座から捉えたパロディである。パロディは、単なる模写でも換骨奪胎でもない。それはしたたかで犀利な批判精神を芸の根底に据えた、この優れた演者を得て初めて可能な批評であろう。

数年前、姫路文学館がささやかな米朝展を催したことがある。私はそのとき、川柳作家の情野千里さんが舞踏家の桂勘さんを演出者に招いておこなった「川柳パフォーマンズ」に、詩の朗読役で出演するため、文学館にいたが、何と右翼団体が押しかけてきた。「憲法九条を守る会」の賛同者に名をつらねている米朝の展示会を、市民の血税で運営する文学館が開催したことが、けしからぬという。米朝師の憲法に対する姿勢は明白である。「戦争は人殺しを称賛する。平和で無うて落語はできまへん」

この信念は芸への情熱と不可分なのだ。

朝桜米朝はんが逝かはつて 茉莉子

うた
神戸詞あしび

89-2015.03.29 大橋愛由等



兵庫県現代詩協会の文学紀行(生野銀山)

三月の雲たちは
うろたえていた

▼15.3.11 / 父・大橋彦左衛門が生きていれば今日が89回目の誕生日。父はいまどこでなにをしているのだろうか。幼いころに過ごした台南(台湾)や、大学生として暮らした旧満州・新京(中国東北部、現・長春)を憶っているのだろうか。それともアクセントが抜けなかつた堺ことばでだれかに語りかけているのだろうか。

▼15.3.12 / 自転車で芦屋に向かう。雨雲とともに移動。阪神・淡路大震災から三日後に東灘から電車が動いている阪急・西宮北口駅まで徒歩で避難した20年前を思い出す。あの時は、倒壊した家屋が国道2号線まではみ出し、車線を減らして、さらに渋滞をひどくさせていた。

▼15.3.15 / 兵庫県現代詩協会の文学紀行に参加した。一台のバスに乗ってまず丹波篠山へ。街を散策。蔵元で利き酒や土産を購入。

続いて生野銀山に向かった。案内に従い坑内を見学。鉱夫の過酷な労働内容を知る。30歳まで生きていれば長寿だとか。

▼15.3.16 / F
M わいわい「南

の風」の生放送が午後1時から。特集は「A(奄美)Pop s」。里アンナが所属する「黒船」を紹介。ジャズを基本に津軽三味線とシマウタの音が重なっていく。あと与論出身の川畑あきらの曲も。番組終了後、大阪へ。山羊チーズを買ったりスペイン風バルに行ったり。

▼15.3.19 / コンクリートポエムを作ってみる。ネットで検索すると実に多様な形状のものがあつて驚く。私が作ったのは読むことを前提としているもの、下から上に、右から左に読む箇所も。それをパソコン上で作成するのに若干の知恵と工夫が必要だった。文字数はちょうど百字に収めるようにした。

▼15.3.21 / 「吟遊」エッセイのテーマは、奄美で俳句を作ることについて。本土(ヤマト)の四季とは異なる気候風土にある奄美では、季語の殆どが使えない。こうした通時的な意味での季語は奄美独自で創出するとして、共時的な季語にするす季語に代わる文化コードを指定できるのではないか。

▼15.3.24 / 「法治国家弱きものには強くでる」とは自作の川柳。翁長雄志・沖縄県知事が辺野古沖への移設工事を一週間以内に作業停止をと沖縄防衛局に言い渡したのに対して日本政府は一度認めた事実を翻すのは「法治国家にあるまじき」と不快感。国はねじ伏せられると思う相手に対して強圧的だ。

▼15.3.25 / 「望みなら琉球処分なんでも」―法治国家・日本の沖縄県に対する「粛々とした」諸手続きは、なんともエグイ印象を与える。まるで平成の琉球処分のようだ。常に上から目線の読売新聞社説もあまりに政府寄りなのでこれもエグイ。いずれも民の息吹きと無縁。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.100
神戸

2015年03月29日 通巻100号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税込)